

- 一番伝えたいこと「LD の子どもは Gifted Child (ギフティッド・チャイルド) である」
- 始めに次のことを言いたい
2007 世界コーチ連盟大会にて、ストックホルム経済大学助教授であり経済学者であるシェル・ノードストレム氏がイギリスのビジネス界で一代で成功した人たちの唯一の共通点として発見したのが、その人たちの 44%がディスレクシア（難読症）だったという事実。
- 私は世界中を見てまわっています（実際にはこれからあちらこちらに行く予定）。その中で日本とのギャップを感じている。LD の親として海外をまわり、日本にはしっかり LD 対策ができる学校が存在しない。だから日本からもヨーロッパやアメリカの学校へ子どもを送りだす親がいる現実がある。
- 私の息子は英語ができたからスムーズに海外のインターナショナル・スクールへも参加することができた。他の子どもは必ずしも最初から英語ができるわけではない。だからこそ Gifted では最初からお子さんの教育を英語でします。Gifted は最短 1 年、最長 2~3 年でお子さんが海外の学校でやっていける英語力をつけるお手伝いをします。
- なぜ私が Gifted を始めようかと思ったのか？
- なぜこのスタイルの学校なのか？
- こういう目的のためのこういうスタイルの学校をやります。
- 日本には集中して海外の学校に留学するための準備ができる学校がない（オブラートに包んだ表現でこれを言いたい）。
- 私が調べるうちに海外には LD 児の専門プログラムのある学校があることを知り、とても自信をもちました。
- 日本には LD 児の専門プログラムを持つ学校がない、と言うよりは、ディスレクシアに対する根本的な考え方が違う。日本の定義は「読み書きはできないが、知的遅れは伴わない状態」。この定義では子供たちに対する「期待感」がない。つまりギフティッド・チャイルドの考えがない。既存の日本の学校は、子どもの底上げをすることを目標としている。文字を読めるようにしましょう、計算ができるようにしましょう、というレベルが目標になっている。こどもにはギフトがあり、その子のギフトを見つけ出し、徹底的にそのギフトを伸ばしていくプログラムが世界中にはこんなにあるのに、日本の目指すところはこのレベルである。

- ディスレクシアをインターネットで検索すると英語やフランス語の情報（学校や学習メソッドなど）には数多くヒットする。つまり海外でのディスレクシアについての概念は、日本のものと大きく違う。

<価値観「忍耐」>

- 私の子どもは私が気付かないうちから耐え忍んでいた。いじめられたり、「バカ、死ね、遅い、怠けている！」などのひどい言葉を浴びせられ、じっと耐えていた。
- ホームティーチャーや地元の小学校で彼のことを理解してくれる人たちに囲まれて初めて「ボクはね、ママ、耐えてきた」と、子どもが言葉に出して言ってくれた。「ボクがどうやって耐えてきたと思う？」と私は子どもに聞かれた。私が「どうやって耐えてきたの？」と尋ねると、「ボクはね、哲学をもっているの」と答えてくれました。「ママに言ってもわからないと思うけど、ボクはその哲学をもっていないと4年間やっていけなかった。」この子どもの言葉を聞き、子どもは修行していた、ずっと忍耐強くがまんしていたんだと思った。私自身が耐え忍んできたことに比べて、子どもの忍耐は「無」から始まる忍耐だと思った。同時に、子どもの様に少し考えられるお子さんにもこの種の忍耐は共通していると思った。子どもが耐え忍んだ4年間のことを告白してくれたことで、私自身もギフトドをやっていく忍耐をしないといけないと思った。
- ギフトドに来られるお子さんも同じように耐え忍ぶ経験をしたことがあるはず。そしてその姿を見ている親も心を痛めているはず。親子の忍耐に私は入っていく。つまり私は自分の経験から子どもの忍耐も、親としての忍耐もわかり合うことができる。その両者の気持ちを理解することなしに、ギフトドをやっていくことができない。
- 学習障害児センター等の先生や専門スタッフが私と同様に問題を抱える子どもの親だったら、相談に来る親の気持ちを心底わかってくれるはず。もちろんそのようは職場で働いていらっしゃるのだから、一般の方よりは理解しようとしてくれる姿勢が数段優れてはいるものの、親でないとは理解できないものがある。
- またそこには、親でもわからない子供の気持ちというものも存在する。私が文献等を調べる限り、LDの子どもには比較的知的レベルの高い子供が多く、親が思ってもないようなことを考えたり、親の心配までしてくれる。この分野を知ってから4年ですが、どちらかというとも子どもが親に気を使っているケースが多いように思えます。「学校でこんなことを言われた。先生が自分にはこんな態度をとる。」こんなことをお父さん、

お母さんに言ったら、何て思われるだろう、どう思うだろう？と子どもが先に心配をする。

- 忍耐はキーワード。親として、子どもにとって、そしてギフトッドを始める私にとって。
- 「忍耐」という言葉はどの親も惹かれるはず。避けたい方もいれば、ちゃんと向き合えることばのどちらか。ただ言えるのは、親はこのことばを避けてはいけない！なぜならば、子どもは避けてないから。親が避けるということは、子どもの才能をみすみす流してします。それは親にとっては楽かもしれない。
- 私が子どもに何らかのギフトがあると信じているならば、私は親として子どもをいろんな場所や先生の所へ連れて行かねばならない。その場で、時には子どもの優れている点を指摘されるものの、ある分野や能力に関しては非常に低いレベルだとはっきり言われる。親はその現実から逃げてはいけないが、実際は逃げている人が多い。なぜならばお国柄だと思う。ところが海外は違う。海外では、この部分は低いけれど、他にもっていないこういう部分は光っているんだよと言ってくれる。私の子どもの場合、どの部分が光っているかはまだわかりませんが、その部分にかけてあげたいし、その道を親として作ってあげたい。その道をつくってあげるのが、親が逃げないということ。私が逃げなかった結果出来上がったのがギフトッド。
- 私があちらこちら行き、いろんな方から話を聞いた中で感じるのが、教育現場での先生方の忍耐。PTA や子供との関わりの中での忍耐。
- 2007年4月から発達教育支援法が施行されたが、教育現場ではまだまだの状態。
- 日本の既存の教育機関では適度に助けてはくれますが、海外の学校のように学校として安心して丸一日預けられるような場所はまだ日本にはないことに私は気づき、たまたま矛先が海外に向いた。
- 私の子どもは恵まれていて英語ができたので、海外での適応能力が異常に速かった。ところが、英語ができないLD児だったら、心がとてもナイーブだったり、デリケートだったりするので、英語ができないことで普通の子ども以上にきつい思いをするだろう。そのため日本で、海外の学校と同じような環境でそこそこ英語を定着させたい。
- 私の子どもは海外の学校に通ったことで、まさに地獄から天国に行ったかのように顔

つきがかわった。暗い顔をして日本の学校に通っていた子どもを初めてスイスのサマースクールに連れて行ったことは、私にとっては清水の舞台から飛び降りるような気持ちでした。

その1ヶ月後、子どもを迎えに行った私の目に飛び込んできたのは、7年目にしてこの子は何て子どもらしい顔をするんだという印象でした。1か月前は泣きながら行きたくないと言っていた子どもが、1ヶ月後には帰りたくないと言いつつ。

日本に帰国後、「スイスに戻りたい」と言い出す子どもに対して、これは一時的な逆ホームシックだろう思っていた。ところが子どもにとっては、来年の6月にまたスイスに行ける！ということ、彼なりの哲学というのでしょうか、ずっと強く思いながら一年日本で辛抱した。この経験を通して、子どもはスイスならびにヨーロッパの学校でやっていけると私は思い、LDの学校探しを始めた。

- 同じ悩みをもちながらも、専門機関に行くことを怖がる母親が多い。はっきり診断されることが怖いことの裏側には、自分の子どもの何かが変だと、普通の子と何かが違うんじゃないかと気づいている。ただ頭が悪いんじゃない、とは思っている。
- 私も同じ思いだった。そして専門機関を尋ね歩くうちにはっきりとわかった。子どもの場合、読み書きレベルは4、5歳児レベルでしたが、言語の理解や表現レベルはもう18歳レベルと診断された。そのせいか、英語であれ日本語であれ、子どもの口から出てくることばはまるで大人と話しているような感じがする。また暗記する力が非常に高い。読み書きのサポートさえあれば、テストであればほぼ100点に近いものをもってくる能力があるはず。

日本は筆記試験で物事を図る社会なので、いくら子どもが理解していると先生がわかっているとしても、テストで出来ないと所詮学校の評価はゼロ。すると学校の成績もそういった成績になる。LDの子どもはプライドが高い子が多いように私は思うので、そういった成績が続くことで子ども自身も自己嫌悪に陥ってくると思う。親も自己嫌悪に陥って、2次障害を引き起こすこととなる。

- 専門家の診断を仰ぐことによって、必ず才能の高低部分が明確になる。私の子どもは読み書きについては低いレベルだが、理解や言語はすごく高いレベルだから、この才能を伸ばして何かできないかと思ったが、日本の学校ではそれを見つけてくれる専門機関がない、場所がない。

そこで海外はどうなんだ？ということで、友人の手助けもあり、ヨーロッパやアメリカには素晴らしい学校があることがわかったので、私の子は早ければ来年からヨーロッパもしくはアメリカの学校に出すことはできる。これで私は親として信頼できる学校に預けることができ肩の荷が下りるが、同じように悩んでいる親や家庭にまずわかってほしいのはLDやディスレクシアの子は頭が悪いわけではない。また導きの仕方を間違えなければ、ある意味何かの達人になる。実際、歴史を紐解いていっても芸術、音楽、建築、数学の世界でも何かを成し遂げている人は何らかのLDと言われている。海外ではそうわかることでも、日本人はそれすら知らない人、教員が多い。この分野は、文献では日本は10年遅れていると言われているが、教育分野は20年遅れていると言われている。だからLDでディスレクシアの日本人の子どもが海外にいる場合、その親は日本にその子たちを行かせる学校がなかった、もしくはもっと伸ばしてあげたいと思っている。ただ皆が皆いきなり海外に行けるわけではない。その行く前のお手伝いができる学校ができたらいっている。

- 忍耐がないと親子ともども成し遂げられない！そしてLDの子どもを導く先生にも忍耐が必要。だから海外の文献にも先生方が辛抱強く待つことが書かれている。待つこと、本人に気付かせること。すべて忍耐。LDの先生は忍耐がないとやってられない。では今の日本の教育はどうか？40人近いクラスルームで、じっと座ってられずに立ってしまう子がいる、消しゴムを投げている子どもがいる、後ろ向いている子どもがいる、人をいじめている子どもがいる、関係のないことをやっている子どもがいる中で、先生がLDの子どもだけを忍耐強く見つめることは無理。
- LDやディスレクシアの子どもだけでなく、教師や導くサイドの人間には忍耐という要素が必要不可欠。子どもにとって導くサイドの人間は、家庭では親であり、学校では先生、他にも習い事や塾でも先生。待つてあげられること、子どものペースに合わせてあげること。それができるのがギフトドの魅力。
- 親に忍耐を持ってくださいとお話するが、子どもはすでに耐えている。子どもは親の知らないところで耐え忍んでいるものが必ずある。それに気づいている親の元にいる子どもは幸せだが、理解できずに逃げようとしている親の元にいる子どもは苦しいはず。
- 私の子どもがどれほど哲学という言葉の意味を知っているかはわからないが、子どもが言うのは忍耐がないとやっていけなかった、ということだと思っている。もしかすると彼の中の忍耐とは1年たつとスイスに行ける、それを待つ間の忍耐かも。スイスに行ったらあの先生に教えてもらえる、スイスに行ったらボクの心をわかってくれる

カウンセラーがいる、スイスに行ったらボクのハンディキャップを理解してくれ、ボクのいいところをかってくれる友達がいる、そんな全てを含めて子どもは哲学と言っているのかもしれない。私はそれを忍耐とよんでいるだけだが。私はこの状態を3年間続け、子どもの確固とした変わらない心を見抜いたときに、日本にいる3年間、11月x3年に比べ、スイスの1か月x3年を考えた時にとっても時間をロスしていると感じた。これは一刻も早く海外に出してあげないと、今はいいけれど、4年生から先は子どもが本気を出せて、本気でぶつかれ、本気で付き合える先生やカウンセラー、友達がいる環境に出してあげた方が、親である私と生活する環境よりも、もうひとつの選択肢の方が子どもにとっては、将来がかかっていると言ってもいいくらいの変化をここでつけてあげなければと思った。もちろん私は寂しいが、親が寂しいとか言っている場合じゃない。そうなるとうちでも海外の学校になってしまう。今、子どもはイギリスとアメリカの両方の学校を視野に入れているが、本人はヨーロッパを好んでいるので、確率的にはヨーロッパの学校になるかと思う。

<価値観「導く」について＝導く、そして導きの大切さ>

- 小さな単位の家庭から考えると、私は子どもをLDでディスレクシアでギフトッドだと思っているが、すべて導き方ひとつで変わる。家庭において子どもがLDかどうかははっきりした後では私の態度が全く違う。

LDとわかる前、子どもは漢字が書けなかったり、計算が異常に遅かったので、私は子どもが怠けている、もしかしたらバカじゃないの？と思っていたし、叱っていた。7歳まで「怠けてるんじゃないの、集中してないんじゃないの！」と言っていた。

ところが子どもがLDでディスレクシアとわかり、計算に時間がかかり、読み書きが非常に苦しいんだとわかってから、教育ママから導き上手な母親に変わらなければと思った。それから子どもを週に2,3時間LD専門の塾のような所に通わせ、その先生の姿を見て、LDの子どもには教育の前に導き方が大事。そのおかげで子どもはひらがなやカタカナを学ぶことができた。

私は教育と導きは違うと考える。LDの子どもには導きが大事だ。LDの子どもと向かい合う時、相手の心になってあげ、心と心で導く教育が不可欠。教育の中に導きがあるのではない。まずは導くことから、そして導く過程に教育があると考え。私は教育学部を出ているわけではないので、これは全くの個人的見解だが、私が見て感じた限りLDの子どもには導きが大事で、読み書きができるように導くとか、数式ができるように導くとか、人とコミュニケーションがとりやすいように導くとか、コンピュー

ターを使えるようにまずは導いて、その先に教育があると考え。

子どもと先生が忍耐をもって、子どものことを考えながら、子どものペースと一緒に歩くイメージ。子どものことを考えながらとは、子どもの心になってあげながら導き、その先に教育がある。子どもの持っているものを引き出すためには、教育よりも導きだと思ふ。子どもの引き出しを開けたあげるような概念。そういう教え方、そういう心じゃないと、子どもたちからは無理やり読ませたりとか書かせたり、音を奏でたりとか絵を描かせたり、算数をさせたりとか理科の実験を理解させたりとかではうまくいかない。子どもは無理やりさせられていると思ひ、辛くて苦しいはず。

そのためにもまずはちゃんとしたチェックテストを行い、子どもの得意不得意などその結果を先生が頭に入れ、その上で子どもを導く。得意な分野であれば、子どもたちはほっておいても自己の想像力で、本能のまま、伸びていくはずだと私は思ふ。ところが低い分野は先生の導き方ひとつで変わると考える。

これも持論ですが、子どもの低い部分を伸ばすのが子どもにとっての教育なのかも。少なくとも子どもにとって教育と導きには若干の違いがあると思ふ。教育を受けさせるという姿勢よりも、導いて引き出しを開けさせるという感じが近いと思ひている。その上に位置するのが教育。子どもが芸術に才能あるのならば、それがわかって初めて専門家に芸術を徹底的に教えてもらえるようにすればよい。音楽、コンピューター、歴史、数学にしても同様。導き伸ばし教育するというラインだと思ふ。

既存の学校は文科省がこの学年ではこれができるはずだからこれをやりましょうという指針に従ひ、LD の子どもに必要なプロセスがない。プロセス、導く、引き出し、引き出しの数、開けた引き出しの中身の量まで把握しないとイケないのが LD の子どもたちだが、現行の小中学では無理。

ところがそれをやっている学校が海外にはある。その現実を知った私、そして子どもは非常に恵まれている。こうして幅広く多く情報をしることができたことを、同じように悩む方に教え、こういう道があることを導くのが私の役割だと考える。

私や私のブレーン、情報収集する人間、訳す人間、授業をする人間が、私の子どもやギフティッドに通ってくる子どもに一番いいやり方、引き出しの数、どの引き出しを最初に開けてあげるべきなのか、引き出しの中に何がどのくらい入っているのか、その全てが導きであり、忍耐である。時間はかかるかもしれないが、時間はかけてでもやるべきこと。テストをして、さっと見つけられるようなものでもなければ、さっと

して欲しくもないこと。

価値観「勇気」

- 自分の子どもが LD やディスレクシアとわかり、やっと 10 歳の子どもを海外にやるのは勇気がないとできない。親は寂しいし怖い。それでも子どもは行きたいという。その理由は子どもにとって海外のその場所は居心地が良く、自分の力を発揮できると自分でもはっきり言うから。親としては怖いし勇気がいるが、7 歳の子どもが海外留学を経験し、10 歳にして海外の学校に行きたいとそう言うからには、子どもにも勇気がいるはず。親子ともども勇気がいる。

またギフトッドを始めて、同じような親からお子さんを預かり、責任を持って極力間違いのない道を歩んでもらうことにも勇気がいる。自分の子どもについては自分だけの責任でいいが、他の子どもは自分の子どもに比べて何倍も神経を使い、何倍も責任を負うことは勇気がいる。

もうひとつの勇気は、同じような親に勇気を持ってもらいたい。子どもを外に出す勇気を持ってもらいたい。親がこの勇気を持たないと、子どもはもっている才能をロスしてしまう。この勇気がないとギフトッドの生徒の親にはなれない。

- 「忍耐、導く、勇気」は親・子ども・教師に共通するキーワードであり、ギフトッドにとっても必要不可欠であり、これがないと海外に子どもを送れないし、ギフトッドの親になれない。
- 親が導くには限界がある。だからこそギフトッドでお預かりして、親ができない導きを私たちがします。親の最高の導きはギフトッドに子どもを導いてくれたこと。だから後はこちらに任せてください。親には肩の荷を降ろしてもらい、後は子どもを海外に出す資金を工面することに集中してほしい。後はプロにまかせてください。
- 親のもうひとつの勇気は、子どもが LD やディスレクシアとわかったことを子ども本人に伝える勇気もある。そして親も子どももそのことを受け入れる勇気。
- LD の子どもは隠れた引き出しをもっている。だからこそ、まずは導き、引き出しを見つけ、そこから引き出し、教育する。隠れた才能のベールをはがす、そこまでの作業が大変なので、忍耐が必要。それを LD 専門の先生の態度や海外の文献を読んで私は感じた。あせってもいけないし、子どものお尻をたたいてもいけないし、親が慌てふた

めいても意味がない。だから重要なことは、親がその子にとって一番いい環境や先生を見つけること。親がそのことを決断する際に必要なのが勇気。

同じ親の会に参加した理由

- 私もあなたもこういう悩みがあったね～と言い合うことでネガティブなところに安住しそうな気がしたから。安心はする。でもそれはいけないと思った。つまり外に出る勇気がなくなっていく。他はそうしているから、うちもこれでいいわと安心する。

ところが私は子どもが7歳の時に一度海外に出したことで、その時初めてサマースクールで出会ったたぶんアメリカ人のお母さんに「あなたのお子さんは日本人なのに英語がよくできて珍しいわね」と声をかけられたので、「うちの子はディスレクシアなの」と言うと、「まあ、ギフトィッドじゃない！すごく先が楽しみね」とにっこり笑って言われた。最初私は何を言っているのかわからなかったし、その時の私は落ち込んでいた。

日本に帰国後ギフトィッドが、海外では天分を与えられた子どもだという意味を知った。これをきっかけに私の考え方はいっきに変わった。そういえば子どもは短期間でルービックキューブができたり、子どもの年齢にあった物語よりも5歳から10歳ぐらい年上の子どもが好きな話を好んで聞くし、テレビ番組も大人が好むようなものを見るし、言葉の暗記力が素晴らしいし、太宰治や宮沢賢治の作品は特に好きで、それらの作品を理解しているか質問をすると理解していることと一致した。

ところが学校の先生の評価は低く、どうして自分が低くみられるのか、どうして自分が人からそういう扱いをされるのかということ子どもは客観的に受け入れている。そのように状況を客観的に捉えられる子どもをすごいと思うし、それを耐え忍んでいた。私は親としてディスレクシアと診断されてから忍耐が始まったが、子どもはそれ以前から耐え忍んでいた。

私は日本でどこに行けば治るのか探した。ある大学の先生は自分の所では診れてもせいぜい月に1, 2回で、時間数にして2時間程度だと言う。ところが海外の文献では月に2時間程度指導してもらっても、何がどうなるのかというレベルだった。

逆にきっちり導いてもらえるシステムのある所に入れると、LDやディスレクシアの子どもはすごい結果を出している学校がある。そんな学校が日本になくて海外にあるのが現実。私の子どもは英語ができるので、これは必然的に海外に出すしかないと思

った。LD の子どもは読み書きができない分、聴覚が非常に発達。おそらく英語を徹底的に入れ、よい導きをすると、英語の習得は早いはず。すると私の子どものように楽に海外の学校に入れると考え、ギフトッドを立ち上げようと思った。

- どうせ海外に行くならば、苦しい部分を少なくして、楽しく楽に自然に英語が入るよう外国人の先生の授業を受けてもらう。たぶん 1 年から 2 年で私の子どもの英語レベルにまでなれる子どもが普通にいると私は思う。1 年から 2 年ギフトッドで学び、海外の学校へと導いてあげることができたらいいと思う。

英語を学び始めたきっかけ

- 北九州で一番いいと言われていたモンテッソリー教育にそった幼稚園に入園させた。当時、私は仕事をしていたので、夏休みに近場のサマースクールに入れたいと思い、北九州にあるインターナショナル・キンダーガーテンの 3 週間サマースクールに保育所代わりに入れた。朝の 10 時から午後 3 時までお弁当をもたせて預かってもらった。

すると 3 週間で子どもの英語が、特に英語の音やアクセントが飛躍的に伸びた。これには英語のできる主人も驚いた。このサマースクールに入れる前まで子どもは英語を勉強したことがなかった。キンダーガーテンは徹底した教育を行なっていたので、先生は全員日本語がわからなく、子どもは容赦ない英語漬けの毎日だった。この経験から私は子供とはこんな環境に置くと自然と全員がネイティブのような発音になるものだと思い込んでいた。ところが同じ年代の子どもの英語と比べても私の子どもの英語がとてもきれいなので、念のため校長先生に聞いてみたところ、こどもの英語力のすごさを明言してくれた。

それから 2 学期が始まると、子どもは頭が痛いとか、お腹が痛いといいはじめ、幼稚園に行きたがらなくなった。不安になった私はいじめられているのかとも思い幼稚園の先生に相談すると、そういう雰囲気はないと言い切られた。ただ子どもは自分の世界を深く持ちすぎていて、他の子どもたちとあまりコミュニケーションがなく、モンテッソリー流の「お仕事」も決まったものしかしたがらない。ただききわけは良く、頭が悪いかと心配した私にも、そんなことはないと言い切った。

子どもが 1 週間も 10 日も幼稚園に行きたがらないので話し合いをしたところ、夏休みに通ったキンダーガーテンは幼稚園の後の時間帯に英会話教室をやっているから、そこに行きたいと子どもが言う。それで月曜日の 45 分間のグループレッスンに参加させた。するともっと英語を勉強したいからレッスンの時間を増やしてと言われ、週 2 時

間に増やした。やがて今度はプライベートレッスンをしたいと言い出し、私が仕事をしている土曜日に2時間のプライベートレッスンを始めた。

そのあたりから子どもの英語がメキメキと上達。最後には子どもが「あそこはキンダーガーデンと言って幼稚園もやっている。ボクはあそこの幼稚園にかわりたい」と言い出した。実はその幼稚園、当時は小汚く、衛生的にもどうかな～という小屋のような所。そんな建物ではあるものの、幼稚園には外車でのお迎えに来る親の姿。その理由はその幼稚園の教育内容の素晴らしさ。その校長が素晴らしく30年にもわたる実績もあったので、校長先生の1週間預けてみてくださいという言葉信じ、それまでの幼稚園に1週間の休暇届けを出して子どもを預けました。すると子どもの顔が子どもらしい生き生きとした顔に変わった。子どもがここの幼稚園に変わる！と言い切ったため、主人と話し合い、それまでの幼稚園を辞め、年少の終わりからインターナショナル・ガーデンに変えた。

4歳までは普通の幼稚園で、5歳から2年間英語の幼稚園に通った。そこでも3、4か月で英語のジョークまでを理解したり言えたのでとてもほめられていた反面、書くスピードが遅いことと文字が読めないことをそこではすぐに見抜かれた。すると、その幼稚園にいたユダヤ人の国立大卒の先生、大学に行くまでディスレクシアのトレーニングを受けていたその女性に、ディスレクシアについていろいろ言われたが、英語だったことと、ディスレクシアについて知らなかったのでわからず、私はそのままほっておきました。ドクターチェックをしてもらえとその先生が言うので、子どもに何らかのハンディキャップがあるのかしらと思ってたぐらだった。そうやって全然わからないまま幼稚園をすごしました。

そして7歳の時、福岡教育大学の中山教授に正式にディスレクシアと診断してもらいました。そんなことがあり、ディスレクシアという言葉は中山先生の診断で初めて聞いたことばではなかった。すでに子どもが5、6歳の時に幼稚園の先生に言われていたことに気づいた。幼稚園を卒園するころには困らないぐらい、すごく上手に英語を話していたので、そのため小学校には問題なく入学できた。もし筆記試験があったらどうなっていたかわからない。

後でディスレクシアのテストをして気づいたことだが、ディスレクシアだからこそ子どもの英語の伸びが速かったと思っている。なぜなら子どもの聴覚は非常に優れていることがテスト結果でも明らかだったから。診断した先生からも、子どもはこれまで耳から入ってくる情報で生きてきたといっても過言でないだろうと言われた。だから弁もたつが、口ほどに読み書きができるのかというと、読み書きでは表現できないで

しょとも言われた。そう言われて、私は聞いて理解ができるなら OK ではないかと思った。読んで書けることも非常に大事だが、聞いて理解できることのほうが私は大事だと思った。日本の公立学校の先生が海外の人とスムーズに話ができるかと言えば、実際はできない。文法的にわかっているけど話せない。読めて書けなくても、子どもがしっかりコミュニケーションがとれていければ、海外の学校にはディスレクシアのサポートがあり、海外の大学の方がディスレクシアに対するサポートが日本より進んでいるのだから、子どもの将来を考えたら必然的に海外の学校に進学させるルートのほうがいい。日本にはそういうルートがないので、専門学校に行き匠の技をつけて大工や調理師、美容師などになるしかない。

専門家の診断を仰ぐきっかけ

- 小学校1年生の1学期はテストの際に読んで書くお手伝いがあったので、ほとんど100点をとっていた。ところが2学期が始まり1週間たったころから「もう学校に行きたくない」と言い、次に「夏休みが終わったらボクがバカなのか、急にみんなが頭がよくなったのかな」と言い、最後には「ボク、死にたい」と言った。

私はいじめられていると思い、先生に相談。先生は子どもが授業中は理解しているが、テストになると真っ白の回答を子どもが提出していると言う。口頭で聞いたことに対しては的確に答えて理解できているのに、筆記試験はいっさいダメだった。絵も描きたがらないし、本を読みたがらない。

あいあいセンターに行ってみることをある先生にすすめられたが、あいあいセンターは未就学児のためだったので、百道にある軽度発達障害児センターに行くことを紹介された。実は我が家では家で勉強させるなという主人の考えがあったこともあり、1回目の相談では家庭学習の時間が足りないのではと言われた。子どもと話をしても知的な遅れがないとその専門家も判断し、とにかく予習復習の家庭学習時間を持つことをすすめられ、それでも何かあったら再び来るよう言われた。

その日から私は心を鬼にして、毎日家庭学習を2, 3時間した。あいうえおから漢字、計算をやったが、子どもに定着しないので私はいらいらするし、子どもは集中力しないしで、きっと子どもは苦しかったと思います。その当時、ノートに書くのでは足りなかったんで、半紙を買ってきて、半紙がいっぱいになるまで「入」や「出」といった単純な漢字を半紙いっぱい書かせても覚えなかった。100回書いても覚えなかったんで、怠けている、バカにしているとビンタをしたりと手を出していた。

やっぱりおかしいと思い、3ヶ月後にセンターを再び訪れ、ちょっとしたテストを受けると、福岡教育大学の経度発達障害児センターの中山助教授に行くことをすすめられた。2, 3ヶ月後の予約が取れ、1回目は2時間、2回目も3回目も2時間ずつテストをして、1ヵ月半後に診断をしてもらった。通常は小学校の3, 4年生までディスレクシアとの診断をくたさないが、私の話を幼稚園の時の話から私の子どもの場合は明確にディスレクシアとわかり診断が下った。ウィスクなどのテスト結果で山があるのがLDであり、その中のディスレクシアですよと言われた。

この診断を受けて私はすっきりした。すっきりした私に向かって、先生はネガティブなこと、「日本では大変です。自殺したり、この子の場合は高機能自閉症のなかのアスペルガーというものもあるので、人の顔色がわからないため人にいじめられたり社会に適応できないかもしれない」などと言う。しかし私は原因がわかりすっきりしていたので「先生、どこに行けば治りますか？」と尋ねると、「ディスレクは治りません」との返事。「治らなかつたら、どんなことに行けばいいですか？」とさらに尋ねると、「私の所では月に2回ぐらい診てあげることができます。でも僕は来月からカナダに1年勉強に行きます」という話になった。

それで私は東京の海外留学のコンサルをしている知り合いに相談し、日本にはそういう学校がないけど本当ですか？という質問に対し、短期的なケアをする所はあるけど専門の学校はないと答えられたので、海外にありますか？と聞いたことから学校探しが始まった。ただ最初から専門の学校に活かせる前に、そこの社長が子どもと面談した結果アスペルガーではあるかもしれないけど、そんなに自閉症の度合いが強くはなく、人とコミュニケーションがとれるので、まずはディスレクシアであることを横に置いて、傷つき自信をなくしていた子どもに自信をつけさせる意味でも海外に出して見たらという選択肢のひとつでスイスのTASISのサマースクールに行かせた。

今思えばそれが成功の第一歩。私はそこに行かなければギフティッドという言葉にも出会わなかったし、導いてくれる先生やカウンセラーの存在が海外にあること、それに子どもがこんなにも変わることに気付かなかった。気づくチャンスを与えてくれたのが、この最初のTASISへの留学だった。その時にわかったことは、学校探しは国内でなくてもいいってこと。世界レベルで探せば学校はいろいろあるんだ。そのためのキーワードは英語。英語ができるにこしたことはない。ディスレクシアの子どもは英語の習得が早いだろうから、ギフティッドのようなシステムをつくる必要があると思った。

ギフトィッドでゆずれないこと

- 親が全面的に信頼してもらうこと。私たちのやり方が気に入らなければやめてもらっても結構。
- ビジョンを常に持ってもらう。子どもの才能が明らかになる過程で、どの学校に行くかを明確に決めてもらう。子どもが学ぶうちに修正・変更したくなって進学先の学校を変えるのはOK。ただいつも「この学校に行こう！」という明確な進学先をもってもらう。そのためにも私たちはおすすりできる海外の学校のパンフレット等資料を用意している。ここの学校はこりいうサービスがある、ここの学校の強みはこれである、お子さんに合うのはこれでしょうかね？と複数ある候補の中から決めてもらう。最初具体的に学校が絞れない時は、漠然と行く先の国名・地域だけでも決めてもらう。それによってこちらも導き方が変わる。小さい目標はやめてもらう。
- 子どもにチャレンジさせる親。親が子どもの行動の制限を設けない。親が子どもの色を勝手に決めないでほしい。絵が好きな子どもには絵ばかりを書かせる親がいるが、絵が好きな子どもの多くは数学が好きだったりする。その判断すべてをギフトィッドの先生に任せて欲しい。
- 子どもが発する信号を見逃さずにキャッチしてほしい。例えば子どもが「ボク、ギフトィッドに行ったけど、ボクはバカなんだ」と言ったら、親はショックを受ける。私の子どももそうだったが、自分のことを自覚できることはLDの子どもにとっての飛躍の第1歩。

子どもには2つのタイプがあり、教えられて自覚しなければいけない子と、そして自我が目覚めて自分で自覚する子。前者の子どもはスマート、後者の子どもはすごくスマートだと言われる。自分で気づける能力がある。気づいたことの信号が、子どもの顔色だったり、食欲だったり、言動だったり、お風呂に入らなかつたり、普段見ないテレビを見たり、普段見るテレビを見なかつたり、いろんない信号を出すので、親はまずその信号をキャッチする。親はその信号の意味を判断できないかもしれないので、専門家の先生に相談してほしい。逐一そのようなことは報告して欲しい。

これは実は自分の子どもに実際に起こったこと。子どもは急に集中的にホームティーチャーの先生方の授業を受け始めた。まるでICUで集中治療を受け始めたようなもの。いろんない先生からいろんない角度で観察され、アプローチされた。1ヶ月後のイタリア語での授業の時、子どもがトイレで泣いていた。泣いていた理由は「先生たちはこんなにも必死に教えてくれているのに、ボクは結果が出せない」ことだった。「ママ、ボク

は本当にギフティッドなの？バカじゃないの、やっぱり？」それを言われた私は落ち込み、それを私から聞いた先生も落ち込んだ。

その先生の先生に当たる人にそれを伝えると、「ワンダフル、ワンダフル、ワンダフル」とのメールが返ってきた。そして「自分の身近な例ではそこにいくまで4年かかった例がある。この子は1か月でそこに到達した。すごいじゃない。まずはそこから始まる」。そう思った時がひとつのチャンスであり、一皮むけた時。

そして、そこから別のプログラムを立てるようになった。子どもは進化する。進化の度に当初用意していたプログラムでは間に合わなくなるので、別のプログラムを与えないといけない時がある。今までは集中的に社会や理科をやっていたのに、ちょっと芸術や精神性を高めるために哲学をいれてみるとか。私の子どもの場合には落ち込んだ時に算数をちょっと休んで、哲学的なこと、つまり歴史の偉人達に時間を費やしたら、さらに子どもは3日単位で自分について考え、自分を客観的に見ていた。

これができるようにしてくれたのは先生方の力。私一人だったらきっと慌てふためいていた。ここで専門家からの的確なアドバイスをもらえると先生方も安心、親も子どもも安心。LDやディスレクシアの子どもは心の動きが激しい。精神性が高い。だから親にも気を使う。

- 子どもが進化するときに驚かずに受け止めて欲しい。それまである意味放置状態にあった子どもに薬を与えていくようなもの。その過程で副作用のようなものが出るが、それを親は受け止めて欲しい。驚かないでほしい。「ママ、やっぱりボク、死んだほうがいいんじゃないかな」と私の子どもは言った。深い意味をもって子どもが言っているかどうかはわからない。それでも親は受け止める。

そしてこれまで親がすべて背負っていたものの半分をギフティッドの先生方に背負わせて欲しい。これからは子どもを見守るサイドにたってほしい。子どもの意見を聞き、とにかく驚かない。もしかしたら「ママ、パパ、ボクね1年後って思ってたけど、半年後からアメリカに行きたい」って自発的に言うかもしれない。それを驚かずに、勇気をもって受け止めて欲しい。

- また進化の過程で思いもしなかったような部分や能力が低いことがクリアになることもある。それも受け止めて欲しい。いいこと悪いこと含めてクリアになっていくから、それを受け止めて欲しい。クリアにならないよりはいい。いいことも悪いことも知らずに、子どもの道をつけてあげることはできない。

- すべて親の心次第。子どものことがクリアになれば嫌な事もあるがそれでも勇気を持ってほしい。それにクリアになることは嫌なことばかりではない。クリアになることで希望を持てることもたくさん出てくる。なぜならギフトッド・チャイルドだから。
- 私がこれほど明言できるのは私が経験してきたことだから。
私が取材を受けた読売新聞社の記者から次のようなことを言われた。私はもともと LD の分野に興味があったけれども、LD の子どもがこういう才能を秘めていたことを知らなかった。こういう教育や考え方があるのなら、もし私の二人目の子どもが LD でも安心です。下津浦さんの学校に行かせたら安心ですよ。後は私と主人が記者として稼いだらいいんですよ。こう言われて、私はとても嬉しかった。
- 親にどんと来い！と思ってもらえるような安心感を与えられる日本で最初の施設になりたい。ギフトッドで起きるあらゆることを親に提供していきたい。

親はパンフレットからどんなことを知りたい？

- ディスクシアの子どもを導くためのどのぐらいのサポートプログラムを持っているか。学校が LD の子どもに対してどのぐらいの思いを持って、腹をすえてプログラムを行っているか。
- 金額
- 環境
- 進学先（大学、専門学校）→ 仕事につけて食べていくことができるのか？
子どもが自立できるか？親が死んだ後でも子どもが食べていけるか？＝最終目標

一番の心配事は子どもの将来、子どもの自立。この学校を出るとディスレクシアの子どもはどんな大学に行っているの？どんな職につけているの？

大半の親は大学進学までで関心が終わってしまうが、一番重要なのはその子の将来。

普通の読み書きができる子どもは何とか食べていくことができる。LD の子どもの場合は、親の目が黒いうちに子どもが職につけるのかどうかに関心事。子どもの将来や自立を親は買う。子どもが人に迷惑をかけずにちゃんと食べていけるかどうかの安心感。親はそこまで考えるのが責任。もちろん普通の親でも同じだが、LD の子どもの場合はそれがもっと強い。

ギフトの売り

- 親の安心感。精神的に楽になり、不眠症や過食症がなくなる。
- 家庭で夢がもてる。これまで子どもは養護学校か中学卒業後は専門学校に通わせるぐらいしかないと考えていたのが、子どもは海外の学校に行き、こんな海外の学校を卒業できるかもしれない。
- 家庭でのお荷物のように考えざるを得なかった軽度発達障害児というレッテルを貼られていた子どもが、海外に、イギリスに留学したの？英語が話せるの？というレッテルへと変わる。
- 英語だけでなく、元来日本人がもっていた美しいもの、すぐれたものをたくさん身につけてもらう。ギフトでは美しい日本語をはじめとし、日本人としてのアイデンティティをあげるので、どこに出しても恥ずかしくないような教育を行う。
- 子どもに対する社会の目が変わる。英語や日本語、礼儀や立ち振る舞いも変わる。周囲がビックリするかも。ビックリするような子どもにならないといけないと思う。ギフトの生徒として、海外に出た時に日本人として恥ずかしくない子どもにしたいという願いがある。そういう子どもならば日本でもすごいはず。普通の学校では、時間はないし、雑然としているし、お金がないから、そんな教育はない。ところがギフトではそういう教育が受けられ、これこそまさにギフトから、私たちが信頼して子どもを預けてくださる親とその子どもたちへのギフト。
- 子どもも夢がもてる。今までバカだと言われていた子どもが一度でも海外のサマースクールから戻ってくると、周囲の子どもたちも「あいつ英語ができるって。バカじゃないんじゃないか」ということになる。英語が話せるというアイテムをひとつ持つだけで、子どもは尊敬される。自信がつく。自転車に乗れない子が自転車に乗れた時と同じように、これまでバカにされていた子どもが英語が話せるようになるるとすごいと言われ自信を持つ。それは私の子どもに実際に起きたこと。

<英語が話せなかった時の子どもと話せるようになった後の違い>

顔が明るくなった。ただ単に英語が話せるようになっただけではなく、同じ幼稚園の子供よりも格段発音がうまく一番だった。それはスイスでもあったが、イタリアやロシアからの子どもで英語ができない場合私の子どもは率先して通訳をかけてでていた。そんなリーダーシップをとるなんて、日本では考えられない、子どもの取るような行動ではなかった。英語が得意だから、自分の得意なことで人を助けることができたの

は子どもの成長。そんな成長体験を他の子どもにも体験して欲しい。ただ単に英語ができて本人が満足するだけでなく、他の人をその得意な英語で助けたりできるようになって欲しい。それが自信につながる。

- 自分が変われる。親の概念が 180°C、もしかしたら全て変わる。概念は国や社会にもよるに、育った家庭によっても形作られる。もちろん子どもにもちょっとした概念はあるはず。今まで背負っていた概念、子どもの概念、親の概念も変わるはず。子どもも変わり、親も変わる。今まではマイナスの概念の中で生かされていた。ギフトッドに来ることでプラスの概念に変わり、プラスの概念の中で生きれると思う。必ず概念が変わる！親はそれまで自分の子どもは障害者であり、遅れている。それが、自分の子どもはギフトッドであり、特別なんだと。障害なんていいじゃない。いいところを徹底的に伸ばしてあげましょう。他の子よりも特別なんだから。ギフトッドに通わせているうちに、親は子どもの英語を学ぶスピードの速さにびっくりして、そのことに気づくはず。
- 英語が話せるようになる
- (希望すれば) 多言語が学べる
- 多国籍の先生に学ぶことができる
- その子が思いもかけなかったような得意なものが出てくるかもしれない。得意なものが明確になり、数が増えると思う。
- 人とのコミュニケーションがうまくなる＝人見知りがなくなる
- 今までは見るだけだった子どもが、挑戦するようになる＝チャレンジ精神が出る
- 興味を示す対象が広がる→親にたくさんの質問をしてくるようになる
- 学ぶ意欲やスタンスが生まれる＝成長のしるし

ギフトッドのミッション

「ギフトッドはお子さんの潜在能力を見つけ出し、それを開花させる外国の学校へと導きます」

- ギフトッドの活動を見て、他の団体が大きくしてくれることを政治や企業に気づいて動いてほしい。ギフトッドのその運動のきっかけになって欲しい。
- ミルフィールドのパンフレットが好きな理由
かたちがユニーク